



平成28年11月28日 JR 大津駅前喫茶店にて

## 倉谷 義数さん

(滋賀県障害者スポーツ協会 副会長)

滋賀県出身。三歳の時に急性灰白髄炎（ポリオ）を発症され、左足が完全に動かなくなられます。その後、小学校一年生の三学期から、小学校三年生まで間、親元を離れ滋賀整肢園にて過ごされます。そこで、卓球との出会いがありました。卒園後も、小・中・高と健常者の中で、卓球に没頭され、高校時代にはインターハイにも出場したご経験を持っておられます。その後、社会人になって以降も卓球を続けられ、第一回全国身体障害者スポーツに参加された際に、八田氏（後の、滋賀県障害者スポーツ協会 初代副会長）との出会いがあり、ボランティアで協会の立ち上げに関わられました。現在も一般企業で働きながら、協会の活動に関わっておられます。

## スポーツを通じて、色んな人と出会うこと

廣岡 まず、この滋賀県障害者スポーツ協会に関わられるきっかけとなったことをお聞かせください。

倉谷 まず、一番初めのきっかけというのが、私が、第一一回全国身体障害者スポーツ大会に出た時なんです。その当時は、知的障害と身体障害が別々になってた時の大会で、その時に一緒に出た、滋賀県身体障害者スポーツ協会の初代副会長の八田さんという方がいらっしゃるんですけどね。その方から、びわこ国体が昭和五六年にあるということ、障害者もなんかやらなあかんやろうという話が出まして。それで、この協会の前身である、滋賀県身体障害者スポーツ協会の設立の発起人として一緒に入らせてもらいました、それ以来ずっとボランティアの方で関わらせてもらってますね。

廣岡 あっ、ということ、倉谷さん自身も立ち上げ当初からメンバーの一員として関わっておられたんですね。その頃から、卓球の選手としても活動されていたんですか？

倉谷 そうですね。当時は、どちらかというところの活動というよりは、プレーヤーとしての活動の方が主でしたね。当時は、まだまだ障害者がスポーツをやるというと、リハビリスポーツが多かったんですね。その中で私はどちらか

というと、競技思考の方が強かったんです。というのも私自身、若い時から常に一般の健常者と一緒に競技をやっていましたから、そういった部分でリハビリスポーツというよりは、競技スポーツとしてやっておりました。その辺がやっぱり最初は考え方に若干ズレがあったんです。

廣岡 なるほど。それは同じ立ち上げのメンバーの中でも考え方にズレがあったということですか？

倉谷 そうですね。でも、だんだんと色々な人と関わるうちに、障害と言っても幅広いですから、これは自分のことだけでやってるのではあかんなど、仲間としてやっていかなあかんなどということを徐々に、協会に関わる中で考えるようになりました。だから当時は、リハビリスポーツという中での話ですから、私も一競技者として、「もつと一般の中に入っていかないとあかん」というようなことを言っても、全然わかってもらえないというような感じでした。

私は、元々からではなく三歳の時にポリオになって、左足が全く力も入らんし、動かせんようになったんですけどね。それで、小学校一年の時に東浅井郡、今の長浜市にあった滋賀整肢園っていうところに入ってたんです。

齋藤 そうなんですか。倉谷さんご自身が整肢園で暮らしておられた時期があるということですか？

倉谷 はい。小学校一年生の三学期から三年生までの間、

そこにおりましたね。そこで、初めて卓球に出会ったんですね。先生から誘われて、やっていくうちに段々とのめりこんでいきますわな。その当時は、卓球自体そんなにやっている人も少ないし、昔はやっぱり野球とかそういうスポーツの方がメジャーでしたから。私も、野球の方が好きでしたけど、ただ、打って、守ってというのが出来ても、走るということが出来ませんのね。そういう中で卓球との出会いがあり、卓球をやっていたおかげで、後々に一般の中で一緒に競技させてもらえて、最終的に一般の中で勝ち抜いてインターハイに出させてもらって、それで自分の人生が変わったのかと思いますけどね。

だから、自分が自ら一般の中に入っていこうとしないと、絶対自分を変えるということはできない。いつも哀れみをもらっているだけではないんだと。で、たまたま高校に行った時の、部活の先輩から「お前は障害者やけど、一般と同じように扱おう。だから同じように練習もさせるぞ」と言われたのが、ものすごく嬉しかったということは今でも覚えていますね。認めてもらったというか。どっちかっていうと、哀れみの目で見られることの方が多いですね。かわいそうとか、ちょっと助けようとか、そういうことを言われるけど、一切そういうことをなしに、同じように扱おうと言われた。それが一番自分にとってよかったんと違

うんかなって思いますね。まあそうは言っても、健常者と同じようにやろうと思うと厳しいですわね。でも、それを何とか乗り越えて、高校時代にインターハイに出られたっていうのが、最高の結果でしたね。自分のそんな経験があるから、他の障害を持っている方にも、「自分からみんなの中に入っていかなきゃあかん」と当時言っていたんですけど、なかなかみんなの気持ちとしてはそこまでならない。いきなりそんなこと言っちゃって、そんな僕らでできますかってなるからね。そこで、その様子を見ている健常者の方も、あいつらは無理やっていう見方になりますやんか。それをどうにか払拭して、向かっていく気持ちじゃなかったらあかんのかなって。私も負けん気も強いもんで（笑）。

廣岡 そうなんですか（笑）。倉谷さんは、元々負けん気は強い方だったんですか？

倉谷 あー、元々そうですね。喧嘩でもしょっちゅうやってました（笑）。まあ後から聞いた話なんですけど、色んな人から負けん気は人一倍強かったって言われますからね。

齋藤 まあ負けん気が強くないと、なかなかインターハイ出るまでいけないですよ（笑）。

倉谷 だから、やっぱり社会に出てからも、卓球を通じて人間関係がどんどん広がっていきますし、この人脈って

うのが、このスポーツをやってへんかったら、今日もこうやってここに来てもらっていいことも出来なかったやろうし、今から思えばですけど、よかったと思いますね。だから、こういう障害者スポーツもさせていたいただいて、色々な方々とお出会いして、人の障害の程度もちよつとわかってきて、知的障害者の方も色々とお付き合いさせてもらって、重度の方もいれば軽度の方いますからね、まあそういうことの中でのお付き合いの方法を、養護学校の先生方や、昨年度この事業報告書に掲載されていた吉田先生にも教えていただいたりしてますね。

### 健常者も障害者も一緒に

廣岡 民間企業にお勤めということですので、普段はお仕事をしながら、障害者スポーツ協会の活動に関わってられるんでしょうか？

倉谷 そうですね。こういう事業というのは、どうしても土、日に集中しますのですね。その合間に運営とか、競技内容とか、そういうような打ち合わせの会議を開いています。また、色々な組織に分かれていますから、例えば専門部会とか、卓球やたら卓球、陸上は陸上とか、そういうような会議が、みんながこうやって行こうというような打ち合

わせをやったりしています。それから、私らは全部ボランティアでやっていますので、会議を行うのだったら、夜にやるんですよ。大体が、仕事終わってからやっているので、しんどいのはしんどいですよね。

廣岡 なるほど。今はどちらかというところ、プレーヤーというよりは、サポートする側に回られているということなので、でしょうか？

倉谷 まあそうですね。立場上は、支える方にいるんですけど、私、甲賀市に住んでいることもあって、甲賀市の卓球協会の会長もしています。優先は県の障害者スポーツ協会の支える側の立場でやっていますけど、やっぱり卓球もしたいですわね（笑）。だから地元でやる大会とかは、できるだけ一緒に支える立場でやりながら、一緒に卓球させてもらったりもしています。また、一般の学生の子らも、指導したりしますので、その中に一緒に障害者の人も入っています。自分で車運転するのが難しい人もいますので、親が送り迎えとか出来なかったら難しいんで、親の力も借りないといけないんですけど、それでも行こうかって人は来てくれたりもしてるんですね。ただ、行きたいと思っただけのところは厳しいですね。

廣岡 なるほど。確かに、周りにそういう環境がないと難

しいということですね。

倉谷 ただ、来てくれたらいつでも受け入れる体制にはしていただきますのでね。滋賀県卓球協会の中でも、障害者にもう少し目を向けてやってくれということで、去年か一昨年に初めて障害者も一緒に滋賀県の卓球協会の中に入って、一緒にやって行こうということ、当然指導にも来てもらったりもしています。また、逆に色んなところにこちらが参加させてもらったりもしています。だから、そういう意味では徐々に、一般の中にも認知してもらえようになつてきたという感じですね。

### 負けん気は人一倍？

倉谷 もう片方の左足も動くようにと思つた時もあった、補装具をつけていたんですけど、こんな動きにくいのはかなんと思つて、整肢園にいる間はつけていたんですけど、実家に帰ってきてからは取りました（笑）。結局、補装具があつてもほとんど力が出せへんのですわ。だから、自分はどう片方の右足一本で跳んだ方がええわと思つて、学生の時とかもぴょんぴょん跳んで卓球もやってみましたわ。齋藤 じゃあ、補装具とかをつけずに、右足だけを使って跳んでインターハイ出場されたんですか？

倉谷 そうなんです。跳ぶって言っても人間限界があるから、自分に合った競技スタイルをひたすら磨きました。それで、相当片方の脚力はつきましたね。中学の時からそんなに体は大きくなくて、どっちかといふとかなり小さい方だったから余計に大変でしたわ。

齋藤 その倉谷さんの負けん気の強さは、どこから由来しているんでしょうか？

倉谷 親父は、陸上が得意だったみたいで、明治神宮へ走りに行ったような話を聞いてますわ。三重県代表で。

齋藤 じゃあ、そういうアスリートのDNAは持ち合わせでおられるんですね。

倉谷 まあわかりませんが、ただ負けん気が強かつたつていうのは、やっぱり意地でもついでいこうと思つたら、それくらい負けん気がなかつたらついていけへんと思ひますね。昔は、差別的な言葉もよく言われてましたからね。なにくそという気がなかつたら、一般なんかついて行けないですわ。相撲でも、小学校の時にしようや言うても、右足ひっかけられたらね、もう一発で倒れてしまいますやんか、それにくっそーって思つて何度も向かっていくんですわ。そういう間に、小学校でも中学校でもこいつはちよつと違うな、勝つまでやるというのは、こいつ本気やわ、これは一緒のように見てやらんと、と思つてもらえたように

思いますね。それくらい、負けん気だけは強かったですね。滋賀整肢園にいた時も、元々はあんまりスポーツやったらよくないと言われていたんですよ。たぶん、全く何も理由も根拠もないんやけど、障害者は運動なんか何も出来ないと思っていたと思うんですよ。でも、自分はそんなこと思っなくて、出来るやんけという感じに思っていました。

齋藤　そこで、なにくそって思えた心は、何がきっかけだったんですか？

倉谷　うーんなんでしょうね。同じ人間違うん？同じ人間やのに、そんな差別される必要もないし、同じ人間で出来るんことはない、やったら出来ますやんかと。そういう気持ちにはありましたね。

高校の時も、試合で自分が勝って健常者の人が負けたら、これはあかと相手の意識レベルが変わってくるんですよ。お互い真剣に勝負することで相手は障害者に負けたくない、自分は健常者に負けたくない気持ち、それが相乗効果となって、私を通していた高校は強くなったんじゃないかと思えますね。元々、最初からそんなに強くなかったんですけど、後から色々と社会に出てから聞いたことで、学校の先生は「お前が、そこにいたからみんなが強くなつたんとちゃうか」と。その当時はね、がむしゃらに一生懸命に負けんこうと思って、必死にやっていただけなんで

すけど。だから、もうその当時は、学校の外で勝つよりも、校内で勝つ方が厳しかった。みんな同じような競争意識を持ってやっていたので、今があると思っっていますけどね。

### 勇気をもって、自分を出していかないと

廣岡　倉谷さんがスポーツ協会と関わる中で、大切にされていることは、何かありますか？

倉谷　本当に多くの人に携わっていただいています。ボランティアも含めたら大変な数の方に支えてもらっている中で、その感謝というのはずっと持っていますね。プレーヤーでいる時はなかなか気づきにくい部分でもあったんですけど、自分がこういう立場になって色んなイベントにするにしても、数百人って支えてくれる人がいないと成り立たないのでね。あと、ある程度スポーツが、メジャーになって、これもずっと言い続けてきたんですけど、分け隔てなくやって行こうとしても、ある程度は競技力も追及していきますね。やっぱり、人に見てもらおうもんとして、ある程度競技性も推進していかんとあかんなど。競技スポーツとしては、今年はパラリンピックをね、ライブでNHKが取り

上げてくれたので。ようやく世の中の見er目が変わってきたなと。障害者が本当にこうやれば、あんだけの人をこう動かす力があるねやなど。その中でメディアで自分をさらけ出してやることによって、一般の方も変わってくるんだという面で、当時から一般の中に入っていくと言ったんやけど、そういう勇気っていうのは出にくいと。でも、世の中を変えようと思ったら、自分たちが変わらへんだったら、世の中なんか変わるわけがないと。だから、重度の人でもスポーツとしてはパラリンピックまでの道があるので、自分が最初から自分はある道を開きたくない。夢をもってやるっていうのが大事だと思っています。実現するかどうかは別としてですよ。その過程が大事やと思っていますから。それによって、人を見る目も変わってくるし、みんながそうになったら、地域の人も「あいつよう頑張っているから、わしらちよつと何か手伝うことないか」って言うてくるはずですよ。最近ボランティア意識も浸透してきてますので、そういうのも相まって、支えてくれる人も出てくると思うんですね。それが大きな力になってくるんだと違うかなって思います。だから、それを実現するためには、まず自分たち障害者が、変わらんとあかんと思いません。

廣岡 なるほど。自分の可能性を自ら絶って、社会が自分に対して見方を変えてくれるのをただ待つのではなく、自分自身も変わるように努力する必要があるということですね。そうすれば、少しずつ理解してくれたり、応援してくれたりする人も出てくるんじゃないかと。

倉谷 そうですね。自分が変われば、社会の見er目も変わってくると思います。そりゃ、勇気が要ると思いますよ。そんな自分の身体をさらそうと思ったら、勇気要りますよ。そりゃ僕ら子どもの時にでも自分の足を人に見せるっていうのはものすごい勇気が要りましたよ。でも、今は見せた方が良くと思うようになってますね。見せん限りは、わかへんわけですからね。だからそれによって、障害者のスポーツは素晴らしいとわかって来ると思うんですよ。あの体で、あそこまでするんやなってね。ですから、他の障害を持つている方も勇気をもって、自分からその姿を出していく事によって、一般の方が、あの身体でようやりよるな、自分たちもこんなことやってたらあかんわ、もっと頑張らんとあかんわって思ってくれたりね。まあ世の中そんな人ばかりじゃないから、そう上手くはいかへんけどね(笑)。

## 一人でも多く滋賀から選手を

齋藤 二〇二〇年には、東京でオリンピック、パラリンピックが開催され、その後には滋賀での国体開催も控えているわけですが、何か考えていらっしゃるでしょうか。お聞かせください。

倉谷 障害者スポーツも、徐々に注目されてきていると感じていますので、とりあえず、東京パラリンピックに滋賀県からの選手を出したいと思っています。それに向けて強化、人材発掘、育成、そういうなところをこれから頑張っていきたいと考えています。それから、四年後にある滋賀県障害者スポーツ大会に向けて弾みをつけたいですね。そういうことでしょうかりと土壌を作っておかないといけないと思いますね。その競技の育成とか強化の部分についても、今とにかく個人情報が全く入って来ないんで、色んな学校に話をもちかけたりとか、そういう動きもさせてもらっているんでね。だから、そんな簡単に競技力と言っても、人材を発掘しなかったら、自分からやるわって出てくる人もなかなかいないので。養護学校はまだ何となく把握できますけど、私みたいのに、一般の学校の中に紛れている障害者は、個人情報との関係で、絶対に言ってもらえないんです。そこを何とか発掘するための工夫策を考えながら、取り組んで

いるところですね。少しでも早い時期に、そういう人を発掘して育成していかんと、という思いでやっています。今の段階でも、こういう強化練習に一回来ないかって声かけたら、何人かは来てもらってるんで、徐々にそうやって発掘は出来てきているんですけど、もっと多く発掘しないと、とは思ってますね。現在、水泳で滋賀県出身の選手が、リオでメダル取ったりもしていますのでね。卓球でも国際大会に出て、良い成績を残せるような選手もいてるのでね。もっと増やさないと、と思っています。

廣岡 最後に、長い間協会の活動に関わっておられる中で、何か魅力のようなものをお聞かせいただけたらと思うのですが。

倉谷 私の場合は、素直にスポーツが好きなんです。やっぱりみんなのスポーツをした後のやりきった顔、表情を見ていると、やっついてよかったなって思います。もう一つには、やっぱり我々が最初に作り上げた協会っていう自負がありますし、自分が元気な間は、この障害者スポーツ協会には、関わっていかんとあかんという気持ちも根底にはありますね。やっぱり途中で投げ出すわけにはいかんと。そして、この協会がどんどん発展してほしいという思いもありますのでね。それは、また次世代に、引き継いでいかなあかんと思ってる所ではありますね。こ



の会は最初、障害者がボランティアで立ち上げた協会なん  
で、ボランティアとして支えていかんとあかんって熱い  
思いは、私の場合は持っています。  
廣岡 倉谷さんのお話をお聞きしていて、その熱い思いが  
ひしひしと伝わってきました。今日は、ありがとうございます  
ました。